漆黒の狂襲姫・特別篇

二振りの剣 -DUE SPADA-

著者／流遠亜沙

ベアトリーチェ ドゥエ・スパーダ製作／enigma9641

ASSAULT-SYSTEM 文庫

ゾイド。

それは惑星Ｚｉ（ズィー）に生息する金属生命体の総称である。

ゾイドには様々な分類があるが、惑星Ｚｉにおいて単純に『ゾイド』と言った場合は、人間によって戦闘機械獣化されたものを指す。

人間によって造られた機械の機体（からだ）に、ゾイドコアを移植された存在――それがゾイドだ。

ゾイドにとって『生身』と呼べる部分はゾイドコアのみで、機体（からだ）はいくらでも換（か）えが利く。

だが、どんなゾイドコアを移植してもいい訳ではない。例えば〈シールドライガー〉のようなライオン型のゾイドであれば、ライオン型の野生ゾイドのゾイドコアでなければならない。本来の姿と同じ機体（からだ）でなければ、移植されたゾイドコアが、それを自分の機体（からだ）と認識しないからだ。

そして、ゾイドが生命体である以上、個体差もまた存在する。性格やゾイドコアの出力などが個体ごとに違うのだ。

だから、同じライオン型のゾイドコアであっても、〈シールドライガー〉にはなれても、上位機種である〈ブレードライガー〉になれるとは限らない。後者になるためには、より強い生命力――すなわち、高出力のゾイドコアである事が求められる。

こういった個体差はどんな種族のゾイドコアにも見られ、同じ機種のゾイドであっても、性能に微妙な差が生まれる要因の一つである。

しかし、ゾイドの性能は数値だけで語れるものではない。

搭乗者の存在があるからだ。

ヒトとゾイドには相性があり、そこに無限の可能性が生まれるのだから。

漆黒の狂襲姫・特別篇

二振りの剣 -DUE SPADA-

青い空に、白い雲がのんびりと流れる。
惑星Ｚｉ（ズィー）で一番綺麗な風景だと、荒野を駆けながら、わたしは思う。
立ち止まって、流れる雲と同じように、のんびりと眺めていたくなる衝動に駆られるけど――今はそんな訳にもいかない。

だって、戦闘中だから。

「〈ムラサメ・セット〉――展開（アクティブ）！」
わたしのコクピットで、搭乗者（マスター）のアサトが指示をくれる。それに応えて、わたしは両前足の二振（ふたふ）りの剣を展開させる。
右前足の〈ムラサメ・ディバイダー〉。
左前足の〈ムラサメ・ナイフ〉。
この二つをまとめて〈ムラサメ・セット〉と呼ぶ。
『リーオ鉱石』から精製した、この星でもっとも硬い金属――それが『メタルＺｉ（ズィー）』。〈ムラサメ・セット〉はメタルＺｉで造られた小太刀（こだち）で、東方大陸の伝統的な武器の『カタナ』に近い特性を持っている。
一般的な剣のように対象の結合部分を『叩き潰す』んじゃなくて、純粋な切れ味と速さをもって『切断』する。エネルギーや膂力（りょりょく）が必要ない分、使い手の技量が必要とされる、ちょっと使い勝手が難しい武器。
だけど、わたしみたいな〈ヘルキャット〉には打ってつけかもしれない。わたし達はゾイドコアの出力が低くて、格闘戦に特化している訳でもないから。

――あ、遅くなったけど、わたしはベアトリーチェ。
現在の正式名称は〈ベアトリーチェ　ドゥエ・スパーダ〉。
機種は〈ヘルキャット〉で、一応、ゾイドをやってます。
〈ヘルキャット〉はヒョウ型の小型ゾイドで、高速戦闘ゾイドに分類されているけど、あんまりそういう認識はされていないかも。わたしより速いゾイドは、今はいっぱいいるし、ステルス機能に特化した隠密型っていうイメージが強いはずだから。
だけど、わたしは特殊光学迷彩や消音機能、放射熱を抑えた排気システムなんかを撤去しているから、ステルス機としての機能はほとんど残っていない。そういう意味では、もう〈ヘルキャット〉とは呼べないかもしれないけど。
でも、それによって最大積載量（ペイロード）に余裕が出来たし、胸部の小口径二連レーザー機銃もエ

アインテークに換装されていて、より直接戦闘向けに調整されている。
わたし達みたいに〈ヘルキャット〉に選ばれるゾイドコアは、臆病な性格の個体が多い。
姿を隠すのが得意で、敵の気配に敏感で、戦うよりも逃げに徹する――そういう性格が隠密行動を旨とする〈ヘルキャット〉に選ばれる理由。
だから、直接戦闘は本当は苦手。
身を隠せるステルス装置の一切を撤去してるのも、心細くて仕方ない。
でも――それじゃアサトの想いに応えられない。
アサトの役に立てない。
だから、弱音なんて吐いていられない。
わたしは〈ヘルキャット〉としては気が強い方だし、ゾイドコアの出力にも、ちょっとだけど自信がある。
何より――アサトがわたしを求めてくれたんだから、それに応えたい。
ゾイドは搭乗者の気持ちに応えるものだから。

コクピットのアサトが操縦桿を握る手に力を込め、ペダルを踏み込む。
走れ。敵を斬り裂け。お前にはその力がある。
声に出さなくても、アサトの気持ちが伝わってくる。
わたしを信じてくれているのが判る。
ゾイドとゾイド乗りは繋がっているから。
その繋がりが『無限の可能性』
時として、カタログスペック以上の性能を叩き出す理由。
アサトが一緒にいてくれるなら、怖いものなんてない。
怖いものがあるとすれば、アサトの期待に応えられない事だけ。
戦場で散る事になっても、後悔なんてない。
だって――一蓮托生だって言ってくれたから。

「厄介なのが出てきたな……」

〈ムラサメ・セット〉で次々に敵機を叩き斬っていると、アサトが独りごちた。
まるで今までに倒した敵が露払いだったみたいに、大物が現れた。ゴリラ型の大型ゾイド――〈アイアンコング〉。
ライバル機と言われている〈ゴジュラス〉が近接戦闘に特化しているのに対し、〈アイア

ンコング〉はとにかくバランスに優れている。格闘も射撃もこなすし、近接戦闘時の小回りも利く。私みたいに絶対的に攻撃力が不足している高速戦闘ゾイドの天敵の一つ。

装甲が厚いから、背中の対ゾイド二〇ミリ二連装ビーム砲じゃ効果は期待出来ない。勝機があるとすれば、クロスレンジに潜り込んで、コクピットがある頭部をピンポイントで潰す事。

そんなの、普通の〈ヘルキャット〉には無理。

でも――

「〈ベアトリーチェ〉――やれるか？」

アサトにそう訊かれたら、こう答えるしかない。

――ナァアアアオ！

だって、わたしは普通の〈ヘルキャット〉じゃないから。

すべてのステルス装置を撤去して拡張した最大積載量と、胸部の火器を換装したエアインテークは伊達じゃない。オーバーホールを覚悟すれば、限界稼働で時速三〇〇キロオーバーを数分間だけど叩き出せる。

かなり無茶だけど、無理じゃない。

わたしはアサトの期待に応えたいし、アサトもそれを理解してくれている。

搭乗者と絆で結ばれたゾイドに不可能はない。

それが――無限の可能性だから。

「よし――やるか！」

アサトもその気みたい。

普段は気怠い雰囲気で、覇気なんてまるでないのに、こうしている時は楽しそうに見える。

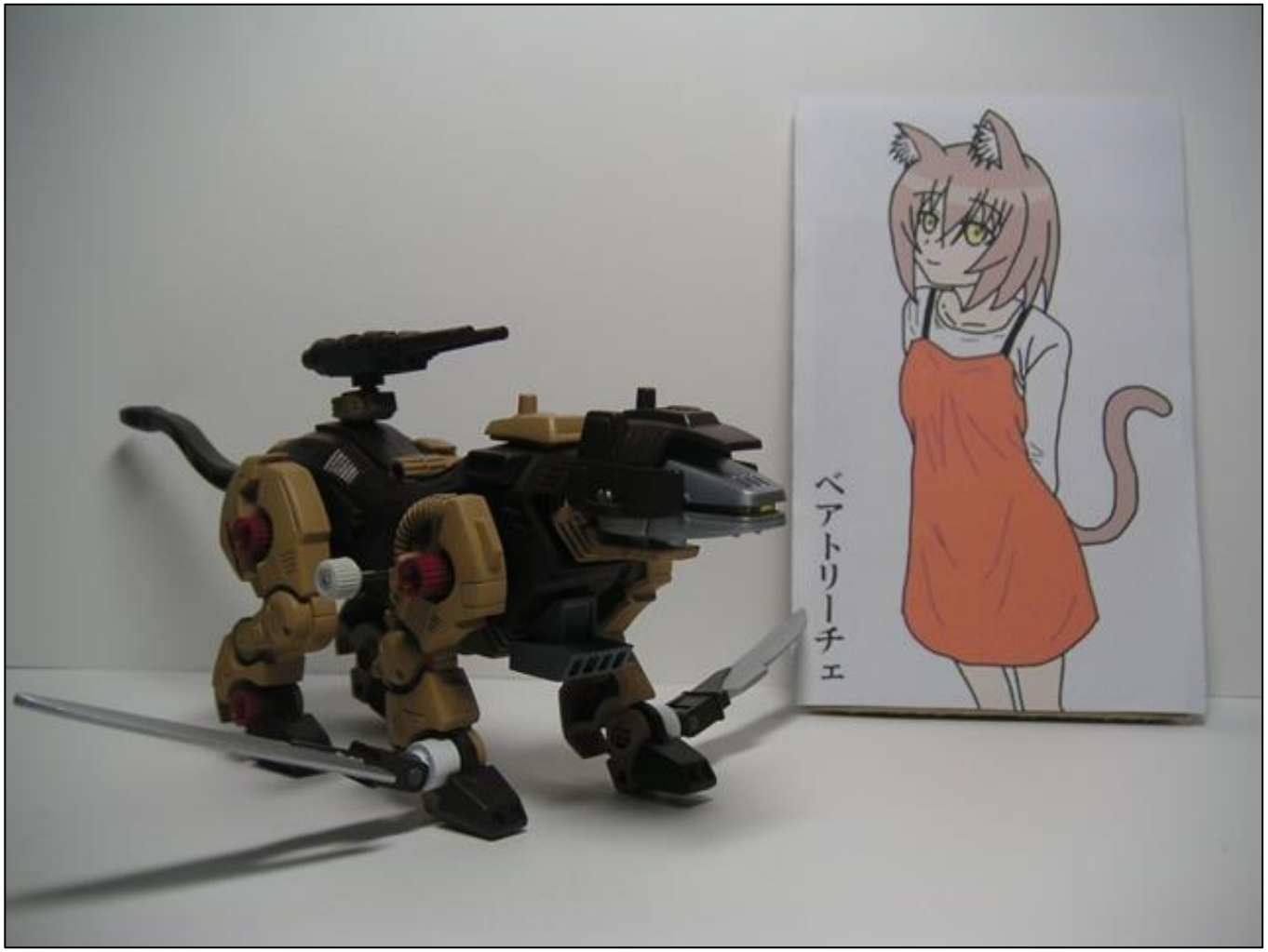
戦う事が――わたしに乗る事がアサトの生き甲斐になるんなら、こんなに嬉しい事なんてないと思う。

わたしはゾイドだから、ヒトとしてアサトを幸せにする事は出来ないけど、ゾイドじゃないと出来ない方法でアサトを幸せにする事は出来る。

それならゾイドとして、ずっと一緒にいよう。

死が二人を別つまで。

だって――わたし達は一蓮托生だから。



ねえ、わたしはアサトに救われたんだよ？
だから、わたしもアサトの救いになりたい。
なれたら、良いな……。

さあ、やろう。
『二振りの剣（ドウエ・スパーダ）』の本領発揮だ。

漆黒の狂襲姫・特別篇『二振りの剣 -DUE SPADA-』〈了〉

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

漆黒の狂襲姫・特別篇『二振りの剣 -DUE SPADA-』をお届け致します。

旧サイトにて連載していた『宵闇の凶終姫』にて、アサトが搭乗するゾイド〈ベアトリーチェ　ドゥエ・スパーダ〉――それを立体化してくださったのがenigma9641さんでした。先日の『第６回ＺＡＯＤ』にてお披露目され、このサイトでも紹介させていただく運びとなり、本作はそれに華を添えるべく書いたものです。

基本、『狂襲姫』シリーズは三人称で書いているのですが、今回は〈ベアトリーチェ〉の話なので一人称にしてみました。いわゆる擬人化ですが、仮想人格がしゃべっていると思って読んでいただければと思います。

しかし、こうして読者の方に立体化してもらえるというのは、本当にありがたいです。名前の由来である両前足の〈ムラサメ・セット〉とカラーリングもイメージ通りで、『ＺＡＯＤ』で実物を拝見した際には、無性に可愛く見えました。

『ヘルキャット』自体、実物を見るのは久しぶりで、ハイヒールっぽい足が特に可愛い事に気付きました（笑）。

そろそろ謝辞を。

まずはenigma9641さんに感謝を。ありがとうございます。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

今後もベアトリーチェ（ゾイドも仮想人格も）をよろしくお願いします。

２０１５／11／20　流遠亜沙

感想を書く

『Gyallery of enigma9641』ページに戻る